ポケモン-月夜のねがいごと-

きくりん@

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「俺と一緒に旅に出て、いろんな人に出会っていろんな所に行って…そして”楽しい”バトルをしよう！」『ブイッ!!』

これはそんな一人の少年と一匹のポケモンがおりなす奇跡の物語である。

後に伝説になるとはまだ誰も知らない…

目次

第1話　”ねがいごと”　――――　1
第2話　”うんめい”　――――　4

第1話”ねがいごと”

「じゃあ次は～…カケル君！君の将来の夢はなにかな？」
「だからーせんせーいつも言ってるじゃんよー俺の将来の夢は
”世界一楽しいポケモンバトルができるポケモンマスター”だよ!!」
俺の名前は【常磐　カケル】ここ【ヒューズ地方】【ヒショウタウン】に住む未来のポケモンマスターだ！今俺は【ポケモントレーナーズスクール】に通っているんだが…

「ふん…なにが”世界一楽しいポケモンバトルができるポケモンマスター”だよ。こんな田舎町からじゃ無理無理。」
「まあそう言うなってリョウ。お前だってポケモンマスター目指してるんだろ？それに田舎町っていうけど珍しいポケモンとかも沢山いるしいいところじゃないか。」
「そうそうアズミの言う通りだよ。それに私達４人ならいい線行けると思うよ。」
そうこの町は人口２００人ちょっとの小さな町。このスクールにも１０人ほどしかいないんだ。大自然に囲まれてたくさんの種類のポケモンがいるからここは《始まりの町》なんて呼ばれてるらしいけど正直よくわからない…

あっちなみにこの３人は【一ノ瀬　リョウ】【長崎　アズミ】【進藤　シズク】俺の幼馴染でもあり親友でもありライバルだ。
「そうよリョウ君。ポケモンマスターになる権利は誰にでもあるのよ。」
そして先生もといこの町が生んだ天才（自称）博士【リーク博士】。
この人は…うん…あれだよ。一周回ってバカタイプ。
「それにしても４人ともポケモントレーナーになるのね。私を見て博士助手になってゆくゆくは博士になるって子はいないわけか～。」
(((課外学習とかいって真冬の森に連れ込んで挙句の果てに迷って自分のポケモン忘れてくる人の下にはつきたくない)))
４人の思いが一致した瞬間だった。
「んで？博士。スクールに居残りさせて将来の夢を聞くだけってことは無いよな？」
「もちろんよリョウ君。今日は君達に大事な話があるの。」
急に真面目になった博士が懐から取り出したのは…博士の彼氏の写真だった…しかも元彼の…
「大事な話ってもしかしてこれ？」
「あらいけない。間違えた間違えた。」
(((本当にこの人は博士なのか…？)))　４人の思いが以下略

「あれー…どこだっけ…ちょっと待っててね」と言って白衣の中から物が出てくること出てくること。某有名青タヌキかよ。そして「あったあった！これよ。」と言って博士が渡してきたのは赤い機械だった。
「これはポケモン図鑑といってね出会ったポケモンを自動で記録してくれる優れものよ。これをあなた達に託します。世界中のポケモンを記録してきて下さい。そしてそれを私の研究材料としてあこがれのオーキド博士に提出します。」
(((結局助手みたいなものじゃないか))) 4人の以下略
「でもそのためには私達もポケモンを捕まえないとダメじゃないですか？」
「そう。あなた達ももう15歳。自分のポケモンを持っていい年齢です。ついてきてください。」
そう連れられて来たのがここ博士の庭のさらに奥の空間。
「ここは【ねがいの場】ありとあらゆる所にヒューズ地方で捕まえられるポケモンがいます。自分で選び捕まえてきてください。ただし、心を通わせることを条件とします。」
カケル　リョウ　アズミ　シズクの4人はここで運命の出会いを迎えることになる…

第２話”うんめい”

「心を…通わせる?」
「そうよカケル君。ここねがいの場にはヒューズ地方特有の気候からいろんな地方のポケモンが住んでいます。そんなポケモン達を無理やり捕まえてもそのポケモンはうまくなついてくれないでしょ?」
「たまに博士らしいこと言うよな。」
「リョウ君?たまにってどういうことかしら?」
「そのまんまだよ。」
「そんなことはどうでもいいからポケモン探しに行くわよー。」
「そんなこと……」
　ちょっと博士について考えるリークであった。
　そんなこんなで始まったポケモン探し。ここで彼らは運命のポケモンと出会う。
　ーアズミー
（ポケモンか…やっぱ一緒に旅するならしっくりくるフォルムのポケモンがいいよな…あっポケモン発見。あれはパチリスか…確かに可愛いけどしっくりとはこないな…

もっとこうぐっとくるポケモンは…）

その後、ポケモンには出会うがしっくりこないアズミであった。しかし、

（ん!?!?!!いた!!この芸術的なまでのボディ！色！そして立派な角！完璧だ！しかしどうやって心を通わせる？僕にできること…あれか…）

そう思ってアズミが取り出したのは特性のポケモンフーズだった。

「ほーら。おいしいおいしいポケモンフーズだよー。沢山あるよー。」とやりながらアズミは思った。

（今食事中じゃん…わざわざポケモンフーズなんて食べないよね…トホホ…）しかし、

『ヘラッ!!』

（おおお!?近づいてきたぞ!?しかもおいしそうに食べてやがる！これは…いける!!）

「なあ、お前俺と一緒に旅をしないか？いろんなポケモンと戦わないか？…おいしい食べ物もつくれるんだけど…」

『ヘラッ!!!!』

「い…いいのか？」

『ヘラーーー!!』

そう言ってポケモンはバックに近づいてきた…

（あぁ…そういうことね…でもこれで俺もポケモントレーナーだ！）

「よーーし!がんばるぞー!!ん?あれは…」
　この時アズミは知らなかった。このポケモンの胃袋の底知れなさを…
　ーリョウー
（フン…やっぱポケモンはかっこよくないとな…どこかにいないかかっこいいポケモン。）
『リオ～～～～♪』
（かっこいいポケモン…）
『リオ～♪』
（かっこいい…）
『リオ～～～♪』
「お前…ついてくるのはいいけどお前みたいなようきなやつは捕まえんぞ。」
『リオッ!?リオッリオ!!』
「そんなに言うなら…」
『リオ～♪』
「なんか技を見せてみろ。」
『リオッ』
　そう言ってこのポケモンは近くの岩に近づいていった。

『……!!!』

ピシ…ピシピシ…バコン!!!!!

このポケモンが手を添えた!その瞬間その岩は大きな音をたてて破裂した。

「…!?」

（こいつ…実は強いのか?あのようきな感じで…くっ…）

リョウは今ものすごく悩んでいた。ポケモンはかっこいいのが理想で今もそれは変わらない。しかし目の前にいるポケモンはそれを凌駕するほどの強さをほこっている…おそらくこのねがいの場の中でも1、2を、争う強さだろう…それによく見たら性格があれなだけで見た目は悪くない…けど…

『リオッリオッリオッ♪♪』

（う…くそ…なんでだーーーー!）

「おーーーーいリョーーーー」

「ん?アズミじゃないか。どうしたんだ今こっちは忙し…」

その時リョウは驚愕した。

（アズミの奴…もうポケモン捕まえてやがる…）

「リョウはポケモンまだGETしてないの?」

ニヤニヤしながら言うアズミ。実はリョウは負けず嫌いなところがある。アズミの

登場はリョウにある決断をさせた。
「んなわけねーだろ。お前よりも早く俺はあのポケモンをＧＥＴしている。お前よりも早くな。」
「あのポケモンをか?リョウも性格が変わったな」
「うるさい。性格はあれだが実力は1級品だ。現にあそこの岩をこいつは手を添えただけで破壊しやがったからな。」
「それはすごいな。」
(なにはともあれ強いポケモンを手に入れることができたんだ。良しとするか。……性格はどうにかせんとな…)
　またひとりのポケモントレーナーが誕生した。後に彼らは凸凹コンビとして有名になる…
　ポツポツ…
「おーいリョー。雨降ってきたから博士んとこ行くぞー」
　ーカケルー
「なぜだ…なぜ俺のところにはポケモンがいないんだーーーー!開始してから早1時間…1匹もポケモンを見ていない!!ほんとにここはポケモンがいるのか!?あの博士嘘ついてないか!?ちくしょーーーーー!!!!」

ポツポツ…ザーザーザーザー!!!
「んな!?おまけに雨も降ってきやがった!!!どこかに雨をしのげる場所は…あったあった!この穴に入るか…」
(んー…それにしてもポケモン…いなかったな…まさか俺はポケモントレーナーの才能がないのか…)
『ブイ～…』
『ブイブイ…』
(ポケモン!?どこだ?)
そのポケモンは雨に濡れながら凍えていた。
(あれはまずい。助けないと!)
そう思ったカケルは穴を飛び出しそのポケモンのところにダッシュした。
「一緒にあそこで雨宿りしよう。」
『ブイ～』
『ブイ～』
(それにしても初ポケモン遭遇がこんな形とはな…)
バシャバシャ!!
(ん?誰か走ってる…あれはシズク!?)

「あっ！カケルーー！私もそこにいれてー！」
「いいけど…シズクもまだ捕まえてないのか？昔からシズクの所にはポケモンが集まってきたもんだけど…」
「そうなのよねー…まだ1匹も見てないのよ…あっこのポケモン可愛い！カケルが捕まえたの？」
「いやーこれはカクカクシカジカで…」
「なるほどそういうことね…じゃあ雨が止むまで私達は動けないわけか…」
　どれほどの時間が流れただろうか…いつの間にかカケルとシズクは眠ってしまっていた。しかし雨が止んだ今でも2匹のポケモンは2人のそばを離れようとはしなかった。まるで”運命”を感じたかのように。そしてカケルとシズクは目を覚ました。
「ん…いけね…寝ちまってたのか…おー雨やんだなー…ってまだいたのか。」
　2匹はそれぞれをまっすぐ見つめている。まず動いたのはシズクだった。
「私についてきてくれる？」
『ブイ』
　そう言ってどこかにいってしまった。残されたカケルと1匹のポケモン。
　カケルはふと空を見上げた。
「綺麗な満月だなぁ…」

『ブイ』

独り言のつもりだったがその言葉には返してくれる存在がいた。カケルはなにかに取り憑かれたかのように自然にその言葉を口にしていた。

「なぁ…お前俺のことどう思う?」

そう言うとポケモンはただ無言で寄り添ってきた。

「…そうか。なあ俺と一緒に旅に出ていろんな人にあっていろんな所に行って…そして一緒に楽しいバトルをしないか?」

ポケモンはカケルの目を見つめている。カケルもまたポケモンの目を見つめている。そして

『ブイッ!!』

―奇跡の物語が始まった瞬間だった―

ーリーク博士ー

「それにしてもカケルとシズクはおっそいわねーモグモグここにはポケモンいっぱいいるはずよ!!モグモグ…もう心配だわ!」

「優雅に月を見ながらモグ団子を食べてるのに心配か…」
「そういうリョウも食べてるよねー」
『ヘラッ!!モグモグモグモグモグモグモグモグヘラッ!!』
「ちょっとお前は食べすぎだよ…」
『リオーー♪モグ』
「静かに食べられないのか…お前はモグ…」
（なんだかんだ言って二人ともいいポケモンを見つけてきたわね…そういえば…）
「二人ともポケモン図鑑はつかったの？」
「あっ」
「あっ…二人とも…じゃあこのポケモンの名前は？」
「「あっ」」
「呆れたわ…」
「「あんた（博士）には言われたくなかった…」」
「まったく…何のためにポケモン図鑑を預けたんだか…ってあっカケルとシズクが帰ってきたみたいよ。」
「おーーーーーーーーい！帰ったよーーー!!」
「元気なことね…」

「見てくれよ！博士！俺とシズク同じポケモンだぜ!!」
「あらほんとね。…よし。それじゃ４人揃ったところで４人のポケモンを見てみましょうか。」
「じゃあ僕から！おーい食べてないでこっちきてー！」
『ヘラッ！』
「えっと僕のポケモンは…ポケモン図鑑起動！」

ヘラクロス　1ぽんヅノぽけもん　オスの姿

ふだんは　とても　おとなしいが　ミツをすうのを　じゃまする　やつは　ツノを　つかって　おいはらう。
「ヘラクロスだよ！みんなのポケモンより絶対ちからもちで…大食いさ…」
『ヘラッ！』
「次は俺だな。こい」
『リオ～♪』

リオル　はもんポケモン　オスの姿

からだから　はっする　はどうは　こわいとき　かなしいときに　つよまり　ピンチを　なかまに　つたえる。
「リオルだ…おそらく1番うるさい。」

『リオッ!?』
「なかなか面白いやつだな～」
「うるさい。そういうお前らはどうなんだ。」
「そうだな。よしシズク一緒に行くぞ。」
「うん！」
「こい！」「きて！」
『『ブイッ!!』』

イーブイ　　しんかポケモン　　オス　メスの姿

ふきそくな　かたちの　いでんしは　まわりの　えいきょうを　うけやすい。かんきょうが　かわると　しんかする。

「イーブイだ！よろくな!!」
『ブイ!!!』
（なかなか面白いポケモンを手に入れたじゃないの。あの２人がどのように育てるのか期待大ね）
「よし！じゃあ今日は遅いし帰ろー！」
（アズミとヘラクロス　　リョウとリオル　　シズクとイーブイ　カケルとイーブイ…う～楽しみだわ!!）

これからどんな物語が展開されていくのか。今はまだ誰も知らない物語…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…